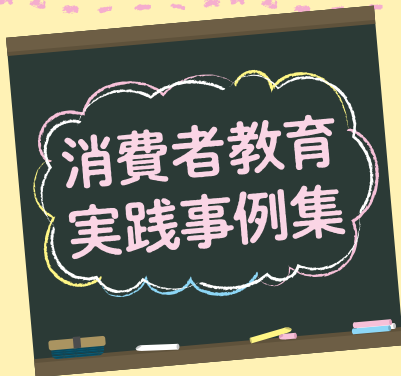


退院後の自立のために —女子少年院での消費者教育—



横井 規子 Yokoi Noriko ファイナンシャル・プランナー(日本FP協会CFP®認定者)
北海道内で子どもたちへの消費者教育に取り組む。PTA等から、お小遣いをテーマとした講演会の依頼多数。学校授業ではゲーム形式で楽しく、お金の大切さを教えている



社会復帰に向けて金銭管理教育に 取り組む少年院

私は札幌を中心に北海道各地で子どもたちへの消費者教育に力を入れています。小学生とその保護者を対象に、ゲーム形式で楽しくお金の使い方を学ぶワークショップや、小中高、専門学校、大学で、金銭管理、契約、消費者トラブル、ライフプラン等の講座も行っています。

北海道千歳市にある女子少年院「紫明女子学院」から初めて金銭管理講座の依頼があったのが、2017年です。同院では、少女たちに退院後の生活設計をより具体的に考えさせ、円滑な社会復帰のためにさまざまな取り組みを行っており、その一環として、適切な金銭管理について学ぶ機会を設けています。私はこれまでに4回、ゲームを交えながらの講座を行いました。

全員が楽しく学べる教材とは

少女たちのお金に対する感覚や考え方はさまざまです。初めて訪問したときは、14～19歳までの10名弱が入院しており、アルバイトも含めて職業経験のない子がほとんどでした。正しい金銭感覚を持ち合わせておらず「お金があっ

たら遊興費に一気に使ってしまう」「お金がなければ悪いことをしてでも手に入れよう」と考える子もいたそうで、担当者から、誤った価値観を変えていきたいという話がありました。

そこで、お金には限りがあり、考えて使うことや、計画的にためることの大切さを、ゲーム形式の教材を活用して伝えていこうと決めました。普段、小学校や中学校の授業で使っているものを使用しようと思いましたが、少女たちの中には、職業経験のある10代後半の子もいます。知的なところでの発達が気になる子もいました。退院後すぐに職業に就く可能性のある子にも楽しめ、発達が気になる子にも理解しやすい、ちょうどよい教材が必要となったのです。

「やりくりさんだん」でリアルな体験

そこで活用したのが「金銭教育総合研究所マネーじゅく」が開発した教材の「やりくりさんだん」です(写真)。以前より、マネーじゅくの教材を使ってワークショップを開催していたこともあり、代表に相談したところ、当時まだ開発中ではありましたが、紹介してくれました。

これは、何らかの障がい特性を持つ人向けに、お金のやりくりが体験できるカードゲームで

写真 「やりくりさんだん」ゲームキット



表 「やりくりさんだん」ゲームの概要

- ・1組3～5名のプレーヤーと、進行係とお金係で構成したグループワーク
- ・カレンダーを用い、日常で起こりそうなことをカードゲームで体験
- ・サイコロの目で日が進んでいく
- ・自分の欲しい物やサービスを、事前書き出し、ゲームの中で購入
- ・1カ月目はルールを覚えながら金銭管理を体験
- ・2カ月目は記帳をしながらゲームを進める

す。「特定非営利活動法人サポートひろがり」が運営する事業所に通う、知的障がいや自閉症のある人々にテストプレイを何度も行い、作り上げたものです。カードを引いてゲーム上で買い物や日常で起こりそうなことを体験していくもので、内容を多少変えるだけで、障がいの有る無しにかかわらず、あらゆる人に使ってもらえる教材となっています。概要は表のとおりです。

講座当日は、3グループに分かれてゲームを進めていきました。一人暮らしの社会人という設定で、食費や家賃等を差し引き、自由に使える金額をわずか3万円にしました。ゲームとはいえ、現実的な数字でやりくりを体験してもらいます。この金額から、自分の欲しい物を購入したり、受けたいサービスにお金を使ったりしていきます。自分の欲しい物(サービス)にお金を使うときは朗らかに笑い、お金を紛失したり、消費者トラブルにあうといった場面では苦笑したりと、どのグループも大変な盛り上がりでした。楽しみながら、計画的にお金を使うことや、貯蓄の大切さにも気づいてくれました。

ゲームというと、現実的ではない出来事や数字が設定されがちですが「やりくりさんだん」では、実生活に起こりそうな体験が可能です。そういったことも支持されていて、全国各地、さまざまな場所で活用されているようです。

社会保障制度の大切さを知る

講座は毎回、2時間程度でゲームと講話という構成で進めていますが、講話で必ず伝えているのが、社会保障制度です。

始めに、若い女性の給与明細例を見てもらいます。初任給は女性の場合で、高卒では約16.2万円、大卒では約20.3万円です(厚生労働省「平成30年賃金構造基本統計調査(初任給)」)。その数字を見て、金額の少なさに驚き、がっかりする子もいますが、多くの方が、この金額の範囲内で自立した生活を送っていることを伝え、金銭管理の大切さを再認識してもらいます。

次に伝えるのが、社会保障制度です。給与明細を見ると、健康保険や年金保険等の保険料が引かれていることに気づきます。額の大きさに納得がいけない顔をされることもあります。

ところが、その保険料が暮らしに役立っていることを知ると、考えが一変するものです。例えば、女性が気になる、出産にかかわる費用に対し、健康保険制度には、妊娠4カ月以上で出産した場合、1児ごとに42万円(産科医療補償制度に加入している病院等で出産した場合)支給される「出産育児一時金」があります。「お金がかかるから、子どもは要らない」という考えが、「しくみを活用して安心して産み育てよう」という意識に変わっていきます。このように、社会保障制度を知ることは大切です。

継続的なサポートをめざして

講座終了後の感想文を見てみると「実際に自由に使える金額の少なさに驚いた」という声が多く寄せられます。しかし、その中でやりくりしていかなければ、安心した生活は送れません。

ゲームの中で、じっくりと考えることもなく買い物を続ける子がいました。これまでも衝動買いが多く、使っていない物であふれていたり、買ったことさえ忘れていたりすることが多々あったそうです。また、お金は簡単に手に入ると考え、欲しい物を我慢することなく買っていたと話す子もいました。ゲームではうまくいっても、現実世界では自分を律することが難しい場合もあります。退院前に何度も学習を続けていくことが大事です。

私が何度も訪問することが難しい場合は、先述の「やりくりさんだん」を時間のあるときに繰り返しやってもらったり、退院後の10年程度のライフプランを考えるワークを提供したりすることも考えられます。少女たちが健全で自立した生活を送ることができるよう、今後も微力ながらお手伝いしたいと思っています。